

【論考】

## 「全員留学」の効果と課題

### －日本学生支援機構海外留学支援制度への提言－

The Effects and Challenges of the Studying Abroad Program for All Students in the Faculty of Global Human Sciences, Kobe University

神戸大学 国際人間科学部 准教授 落合 知子

(GSP オフィス統括コーディネーター)

OCHIAI Tomoko

(Associate Professor, Faculty of Global Human Sciences, Kobe University)

キーワード： 全員留学, GPA, JASSO 海外留学支援制度

#### 1. はじめに

近年、世界各国の大学は「国際化」を掲げ、その実現のために留学生の交流を活発化させている。

日本でも「グローバル人材の育成」という言葉が高等教育の重要課題として語られるようになって久しい。文部科学省は大学に対し、2011年の「大学の世界展開力強化事業」、2014年の「スーパーグローバル大学創生支援事業」など、留学の促進・講義の英語化などによる大学の教育・研究の国際化に向けた補助金事業により、競争的に日本の大学を「グローバル人材の育成」の場に改革することを奨励している（落合，2017 星野，2018）。

こうした中、いくつかの大学が学部全員に海外留学を課す「全員留学」制度を導入した。2019年3月の時点で青山学院大学、立教大学、東京女子大学、関西大学、立命館大学等15の私立大学の国際系学部で、さらに国公立大学でも国際教養大学・国際教養学部（1学年定員175名）、千葉大学・国際教養学部（同定員90名）、神戸大学・国際人間科学部（同定員370名）、山口大学・国際総合学部（同定員100名）、長崎大学・多文化社会学部（同定員100名）、九州大学・共創学部（同定員105名）の6大学6学部が学部生の「全員留学」を導入している（河合塾，2019）。

本稿はこの「全員留学」制度が学生に与える効果と課題を神戸大学国際人間科学部の「全員留学」プログラム Global Studies Program(以下 GSP と記述)を事例に析出することを目的とする。

## 2. 「全員留学」制度とは

そもそも留学とは何であろうか。OECD や UNESCO の統計では「教育目的で国境を越えて大学に在籍する学生」「学位取得目的の留学生」が計上され「大学間協定における交換留学やその他の短期間の留学はこの統計に反映されていない」という(星野, 2018)。また日本学生支援機構(以下本文中では JASSO と表記)が行う「協定等に基づく日本人学生留学状況調査」では留学とは「海外の大学等における教育又は研究等の活動及び、学位取得を目的としなくても単位取得が可能な学習活動や、異文化体験・語学の実地習得、研究指導を受ける活動等」とされている(日本学生支援機構, 2019a)。前者では捨象される短期のスタディツアーや交換留学も後者では対象とされ、JASSO の行う上記調査によると1か月未満の短期の「留学」が全体の6割を占める(日本学生支援機構, 2019a)。本稿では JASSO による「留学」の定義を採用する。

また、学部全員に留学を課す「全員留学」とは何であろうか。その中身は大学により様々である。国際教養大学国際教養学部は1年以上の交換留学を中心とした留学プログラムを全員に課し(奥村、磯貝他, 2017)、山口大学国際総合学部は1年の夏に全員がフィリピンでの語学研修を経験したのち2~3年生で交換留学を行う(山本, 2016)。また千葉大学国際教養学部では在学中に1度千葉大学が単位を出す「留学」プログラムに参加することを義務付け、その内容は短期のスタディツアーから長期留学プログラムまでとバリエーションに富む<sup>1</sup>。このように「全員留学」と一言と言っても、その内容、時期、留学期間、留学形態は大学・学部ごとに異なり、多様である。

本稿では「全員留学」を「学部の卒業要件<sup>2</sup>として海外の大学等における教育又は研究等の活動及び、単位取得が可能な異文化体験・語学の実地習得、研究指導を受ける活動等を義務付けること」と定義する。

## 3. 神戸大学国際人間科学部 GSP とは

神戸大学は2017年、既存の国際文化学部と発達科学部を統合させ、「グローバルイシューを深い人間理解と他者への共感をもって解決し、世界の人々が多様な境界線を越えて共存できる『グローバル共生社会』の実現に貢献する『協働型グローバル人材』を養成すること」を目的<sup>3</sup>に掲げる国際人間科学部を創設し、旧国際文化学部系のグローバル文化学科と旧発達科学部系の発達コミュニティ学科、環境共生学科、子ども教育学科の合計4学科を誕生させた。その4学科を1学部にまとめ上げる共通

<sup>1</sup> 千葉大学国際教養学部において筆者は2017年7月と2019年3月の2回にわたって聞き取り調査を行った。また千葉大学は2020年度より全員留学を国際教養学部から全学に広げることがを表明している。

<sup>2</sup> 神戸大学やそのほかの大学では正規留学生や、健康上の理由、経済的な理由など正当な理由のある学生に対しては例外規定を設け、「留学」の代替処置をとる場合もある。

<sup>3</sup> 神戸大学国際人間科学部ホームページ<<http://www.fgh.kobe-u.ac.jp/ja/node/43>>より(2020年1月5日)。

ミッションとして GSP 必修を全学部生に課す。

GSP は事前学修の「オリエンテーション」(1 単位) とグローバルイシューについて学ぶ「グローバルイシュー概論、演習」(各 1 単位合計 2 単位) 海外「留学」<sup>4</sup>とフィールド学修からなる「GS コース」(3 単位) と GSP で何を学び、どう専門と結びつけるのかを振り返る事後学修「リフレクション」(1 単位) の合計 7 単位で構成されている。

「留学」とフィールド学修部分にあたる「GS コース」には大きく分けて下記の 3 つがある。

### ① 実践型 GS コース

1 週間以上のスタディツアーやインターンシップを指す。スタディツアーは専門教員が引率する場が多く、事前事後に約半年の教員によるゼミ形式の準備や振返りが行われ、フィールド学修は「留学」期間に海外で行われる。国際人間科学部発足前から、両学部の教員によって行われてきた「海外研修」が実践型 GS コースの基盤になっている。2019 年度は「日英イマージョン教育を学び支援するインターンシップ (米国 オレゴン)」「非破壊機材で農産物分析をする (タイ バンコク)」「芸術教育を学ぶ (オーストリア ウィーン)」「移民と文化について学び、国際ワークショップに参加する (イタリア ナポリ)」など計 29 プログラムを実施し、2020 年 3 月末までに 200 名の国際人間科学部生を派遣予定である。

### ② 留学型 GS コース

1 か月～1 年の中期留学もしくは半年か 1 年の交換留学を指す。フィールド学修は留学先で自ら立案して行う。

2019 年度は「高麗大学で 10 週間の夏季大学で専門分野についての講義を受ける」「ヒューロン大学で 9 週間の英語研修後 1 学期正規講義を受講する」等 5 つの中期留学プログラムを実施し、2020 年 3 月末までに 29 名を派遣予定である。また 2019 年度の交換留学については 91 校の協定大学との間での交換留学生を募集し、2020 年 3 月末までに 54 名の交換留学生を派遣予定である。

### ③ 研修型 GS コース

2 週間以上の語学研修及びサマースクールと国内でのフィールド学修からなる。国内フィールド学修には指導教官がつき、フィールドとの調整や学生の指導を行う。2019 年度は「留学」として「ニュージーランド カンタベリー大学での英語研修 (4 週間)」「フィリピンでの英語研修 (2 週間)」「グルノーブルアルプ大学でのフランス語研修 (4 週間)」「メキシコ国立自治大学でのスペイン語研修 (7 週間)」等合計 23 プログラムが催行され、138 名が 2020 年 3 月末までに参加予定である。国内フィールド学修としては「淡路人形浄瑠璃に関するフィールドワーク (淡路島)」「マスターズ甲子園運営のサポート (兵庫県)」「外国にルーツを持つ子ども支援 NGO でインターン」(神戸市)「サイエンスカフェ

<sup>4</sup> 学内的には「海外研修」と表記しているが本稿では「留学」と記す。

を企画運営（神戸市）」等計 34 プログラムを催行し、143 名が 2020 年 3 月末までに参加予定である。



図①GSPの流れ<sup>5</sup>

なお、この GSP を円滑に運営するために国際人間科学部では GSP オフィスを設置し、5 人の専門教員と 4 人の事務担当者が配置され、教育及び学生相談、事務手続きにあたっている。GSP オフィスではオリエンテーションやリフレクションなどの授業を担当するほか、学生の「留学」への参加手続き・指導・相談、健康上や経済的に研修参加が難しい学生への支援、危機管理、奨学金支援、渡航支援などを行っている。

学生は自らの希望に応じて「留学」やフィールド学修の形を選び、4 年間の大学生活の中でどの時期に「留学」やフィールド学修に出るのかを設計し、主体的にプログラムを選択し、専門につながる学びを獲得することを奨励される。

#### 4. 「全員留学」の効果について

神戸大学国際人間科学部に 1 期生として 2017 年度に入学した学生は 384 名おり、そのうち 374 名が GS コースの「留学」を修了もしくは履修中である。GSP オフィスにより、GS コースでの「留学」参加者のすべてに行っている事前事後の学修記録のアンケートによると GS コース参加学生の満足度は 5 点満点で評価し、4.5 点となっており、42.3%の学生が「ある程度満足している（4 点）」、53.8%の学生が「満足している（5 点）」と回答し、多くの学生が GS コースでの「留学」を評価している。

また GSP 事後学修リフレクションでは学生がプロジェクトベースで GS コースでの学びを踏まえて 4~7 名のグループを組み調査・研究・発表を行っている。その中で「留学に行ってもよかったと思え

<sup>5</sup> 神戸大学国際人間科学部 Global Studies Program 履修ガイド 2019 年度版より。

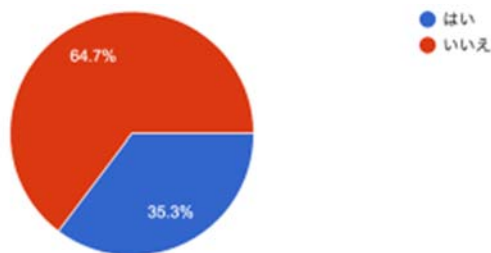
る条件」と題し、1つの学生グループが2017年度入学の子ども教育学科50名と環境共生学科80名<sup>6</sup>を対象のアンケートを行った。有効回答数34名のうち「必修のGSPがなければ留学に参加しなかった」と回答した学生が64.7%に上った。そして91.2%が「GSPに参加してよかった。」と回答している。また「留学」に行つてよかった理由を「良い出会いがあった」(67%)「自・他文化理解が進んだ」(60%)と挙げている(横田, 花山, 山本, 後藤, 宮木 2020)。

このことは海外に出ることに当初、否定的だった学生が「必修」によりいやおうなく海外に出されたことにより、他者との出会いを通じ異文化とそして自分自身に対して考察を深め、「留学」への否定的な見方を改めている様子がうかがえる。

## アンケート結果

GSPプログラムがなくても自主的に留学に行っていたと思いますか？

34件の回答



GSPに参加してよかったですか？

34件の回答

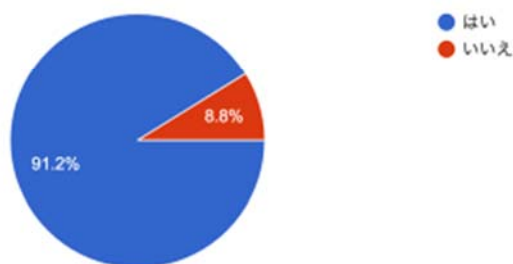


図2 横田, 花山, 山本, 後藤, 宮木 2020 より

2017年度入学生はこの3年間で、延べ422名がGSコースの「留学」に参加している。GSコース「留

<sup>6</sup> 実験系理数学講座を擁する環境共生学科(80名)と、複数の教員免許修得を求められ、大量の必修単位を修得せねばならない子ども教育学科(50名)は海外留学に出にくい分野と認知される傾向にあった。もともと国際系の学部の流れを引くグローバル文化学科の学生(140名)と芸術、スポーツ、心理学を専門とする発達コミュニティ学科の学生(100名)をアンケート調査の対象から捨象しているため、ことさら必修で無ければ海外には出ないという意見が集まりやすかったとも言える。



学」参加者数が学部人数を上回るのは1名の学生が複数回の「留学」に参加しているからである。43名がGSP単位修得後、GSP単位を求めずに2回目、3回目のGSコースの「留学」に参加している。

また2017年度入学生の中で2019年末の段階で交換留学に参加した52名<sup>7</sup>を分析すると、その54%に当たる28名がすでにGSコースの短期の「留学」(研修型の語学研修、もしくは実践型のスタディツアー)や学内の他部局の運営する短期「留学」に参加したのちに交換留学に参加していた(交換留学に行く前に2つ3つとGSコースの短期の「留学」を経験する者もいる)。交換留学前に参加する短期「留学」の位置づけは大きく分類して次の2つが観察された。

- ① 交換留学を志望しており、その準備のために留学先の国や協定大学で開催されるプログラムに参加し情報を収集したり、交換留学に必要な語学要件を満たすための語学習得を目的とした短期「留学」。
- ② もともと交換留学を視野に入れていなかったが、短期の「留学」をきっかけに、海外で学ぶことの意義を理解し、結果的に、交換留学をするに至ったという、交換留学志望の契機としての短期「留学」。

例えば②の事例としては以下のようなケースが存在した。

*(事例1) フィリピンの語学研修(2週間)に参加し、GSPを終わらせるつもりであった学生Aは「留学」中の土曜日にストリートチルドレンを支援するプログラムに参加し、途上国の課題にいかに取り組むかというテーマを発見し、その後インドネシアの協定大学への1年間の交換留学を果たした。*

*(事例2) ニュージーランドの1か月の語学研修に参加した学生Bは「交換留学なんて本当に英語の得意な特別な人のものだと思っていたが、ニュージーランドの1か月で私にもできる、私もしたいと強く思うようになった」と述べて、オーストラリアの協定校への1年間の交換留学を果たした。*

GSPによって学部生全員が必修で「留学」に参加せざるを得ないことは「海外に出る」ことの敷居を下げる。それによって、学生たちは「全員留学」の後、より長期の、交換留学を含む学内学外で設定された「留学」の機会をとらえて海外へと出ていくことが観察された。短期の「留学」が学生たちに交換留学を含む長期留学を選択するための触媒として機能しているといえるだろう。

## 5. 「全員留学」の課題について

<sup>7</sup> 2020年1月現在2020年秋出発の交換留学の補充募集中であり、この数字は暫定で今後もまだ増える見込みである。

GSP オフィスは 2017 年度入学生が第 2 年次終盤を迎える 2018 年末と 3 年次終盤を迎える 2019 年末、2 度にわたって、GSP 未履修の学生を呼び出し、学生相談を行った。2018 年末の時点では 384 名中 39 名の学生が GS コース未履修となっており、2019 年末には 10 名（そのうち 6 名が休学期間を有するので卒業は 2021 年春以降となる）が GS コース「留学」未履修となっていた。これらの学生の未履修の理由について聞き取り調査を行ったところ、その多くはアルバイト、サークル活動が多忙で、プログラム申請の時期を逸していたり、意中のプログラム（交換留学や教員による引率のある実践型 GS コース）の定員に入れず、2020 年度での参加を目指していた。また特に「アルバイトに忙しい」と述べた学生について聞き取りを進めると家庭の経済状態の悪化や、家族の信念として 20 歳以降の学費は自らが賄うべきなので経済支援を拒否されているという事例がそれぞれ複数あった。また自分の志望する分野の盛んなヨーロッパ・アメリカでの「留学」を実現するために<sup>8</sup>過重なアルバイトが原因で心身の健康を害する学生や、保護者の扶養範囲を超えて収入を得てしまった学生が出現するなどの問題も確認できた。学費の安い国立大学を選択した学生を対象に「全員留学」プログラムを実施するうえで、学生の経済的負担をいかに軽減するのかというのは大きな課題であるといえよう。

学生の負担を軽減するために、神戸大学国際人間科学部は GSP を開始する準備段階から、JASSO の海外留学支援制度による奨学金を申請しており、2017 年度から 2019 年度にかけて下記の口数の奨学金を GSP での学生海外派遣のために準備している。

(表1) GSPによる海外研修参加のため  
日本学生支援機構からの奨学金支給人数

	短期研修・研究型	双方向協定型 (交換留学)
2017年度	100人口	46人口
2018年度	170人口	66人口
2019年度	124人口	54人口

JASSO 海外留学支援制度で支援を受ける学生の資格は日本学生支援機構 (2019) b に詳しいが、家計基準のほか成績評価係数（以下 GPA と記述）によって選抜される。GPA を 3 点満点として 2.3 以上の評価基準のものが奨学金支給対象者となる（秀・優を 3 点、良を 2 点、可を 1 点、不可を 0 点として平均値をとる。GPA の詳しい算出方法については日本学生支援機構 2019 b の p. 6 に詳しい）。

<sup>8</sup> GSP の「留学」費用はアジアで 10 万円台から 20 万円台、ヨーロッパ・アメリカ・アフリカで 20 万円台から 60 万円台、と比較的ばらつきがある。欧米やアフリカでの研修を志す場合は経済的な準備が求められる。

ある一定以上の GPA を取り、家計基準を満たすものは、派遣先の国や都市により、月額 6 万円から 10 万円の奨学金が支給され、経済的に困窮する学生には 16 万円の渡航支援金も JASSO から支給されることが可能になった。これは経済的に困窮する家庭の学生の「留学」参加を促すのに大きな助けとなったといえる。

2019 年の短期研修・研究型奨学金の応募支給状況に焦点を当てて分析してみる。

(表2) 2019年度JASSO海外留学支援制度奨学金  
応募・申請・受給状況

	2019年度 JASSO 奨学金数 (人分)	応募可能プ ログラム参加 者数(人)	申請者数 (人)	不可:成績 2.3未満(人)	辞退、他奨 学金受給 (人)	JASSO受 給者数 (人)	返却数 (人分)
短期研 修・研 究型	124	281	131	27	4	100	24

JASSO 海外留学支援制度の支援対象の「留学」プログラムに参加した学生は 281 名存在したが、実際に JASSO 奨学金を申請したのは 131 名に過ぎなかった。さらにその 131 名の中でも 27 名が GPA2.3 の基準にわずかに達成せずに JASSO 奨学金を得ることができなかった。

基準となる GPA 基準を超えられなかったことを本人の努力不足と断じるのは簡単であるが、その背景を今しばらく探ってみよう。

GPA の運用に関して文部科学省 (2014) は「国際的な大学教育の質保証」のために「各授業科目における成績評価基準の平準化、あるいは更なる明確化、厳格化」を奨励している。神戸大学でも大学認証評価で「全学教務委員会等でも成績評価について議論し、全学的に取り組んでいるものの、一部の学部で「秀」「優」が多いなどばらつきが見られるため、一層の見直しが望まれる」(独立行政法人大学評価・学位授与機構, 2015 P27) という文言を受けて 2018 年度より神戸大学では全学的に各講義の評価において秀の評価を受ける学生を各部局の履修者数の概ね 10%以内に、2019 年度からは優と秀の評価を受ける学生を各部局の履修者数の概ね 40%以内にするという取り決めがなされた<sup>9</sup>。

このことは相対的な成績評価が大学教育の中にもたらされたということの意味する。この結果 2017

<sup>9</sup> 実験・実習・演習・卒業研究・20 人以下の少人数履修科目はこの優・秀の評価を受ける学生を 40% 上限を適用しない除外科目と位置付けられた。



年度入学の国際人間科学部生 384 名の場合、2019 年に GPA3.0 満点で 2.3 以上の成績を取れた学生は 54%、208 人となり、残り 46%、176 人の学生が GPA3.0 点満点 2.3 点未満であったことが確認できた。全員留学を掲げ、JASSO 海外留学支援制度により学生を支援しようにも実に 46%の学生がその支援の枠から除外されてしまっているのである。

表 2 で示した 2019 年度 JASSO 応募と支給状況を再び見てみよう。筆者は JASSO 海外留学支援制度留学制度奨学金に応募しながら GPA が 2.3 にわずかに達しなかったため奨学金を受給できなかった 27 名の学生を対象に聞き取り調査を行った。GPA が基準に達しなかった原因を多くの学生が「自分の責任」としていたが、「なぜ力を発揮できなかったのか」さらに詳しく聞いていくと、彼らは大きく下記の 2 つの原因を上げた。

- 1) アルバイト・サークル活動の多忙さ
- 2) 成績基準の不明瞭さ

そこで聞き取り調査対象とした学生のアルバイト時間を析出したところ、8 割の学生が 1 週間当たりのアルバイト時間が 20 時間を超え、1 週間当たりのアルバイト時間が 32 時間、48 時間を数える者もいた。それらの学生は「留学」費用を保護者だけに頼らず、自らの目標とするプログラム参加のために資金を作ろうとしていた。週 20 時間を超えるアルバイトに従事すると学業成績に対して負の影響をもたらす（お茶の水女子大学 教学 IR・教育開発・教育支援センター、2015）という報告もある。学業のための時間を確保するのが難しいほどの長時間のアルバイトをせざるを得ない学生が、厳格な相対評価のもと、アルバイトの必要性の低い学生との競争に敗れ、GPA 目標値にわずかに及ばなかった場合、それを学生の努力不足と断じてしまっているのだろうか。GPA の相対評価の厳格化が進む現状では、より支援を必要とする経済的困難のある学生ほど JASSO 海外留学支援制度の援助を受けにくくなっていることが観察された。

神戸大学では JASSO 海外留学支援制度以外にも大学独自の海外留学支援制度である神戸大学基金奨学金を設置し、JASSO 海外留学支援を受けられない学生を支援している。しかしここでも、奨学金支給基準は GPA4.3 点満点 3.4 ポイントが必要であり、この成績基準は JASSO 海外留学支援制度の基準とほぼ同等である。これでは経済的困難ゆえに過重なアルバイトを強いられる学生は相対的評価のもと、奨学金支援から除外され、より困難な状況に陥ってしまう。そうした奨学金選考から漏れた学生が、奨学金に頼らず「留学」に参加しようとさらに無理なアルバイト時間を設定し、心身の健康を害してしまった例も一連のインタビューの中で確認された。

## 6. まとめにかえて—提言—

神戸大学国際人間科学部の GSP は学部全員を「留学」させることで「海外に出る」ことのハードルを下げて、「留学」を一般化し、9 割の学生がその学びに満足を得ている。また短期「留学」は交換留

学を含むより長期の「留学」参加への意欲・能力を育むことも観察された。

2021年度より JASSO は JASSO 海外留学支援制度の奨学金の新規申請分から 31 日以下の短期の留学をその支援対象から外すことを公表している。これは短期「留学」を踏み台により長期の「留学」へ羽ばたこうとする学生の踏み台を外すことになるのではないかと危惧する。長期の「留学」の準備段階として短期「留学」の役割についてのより詳しい検証・研究を今後の課題としてあげたい。

また経済的に厳しい学生のために設定された複数の奨学金が GPA の運用の厳格化の中で本当に支援を必要とする学生に届きにくくなっているという現状も確認できた。すべての学生に対し GPA で機械的に奨学金受給の資格の有無を選別するのではなく、家庭の経済的状況が厳しく、アルバイトが必要な学生には留学志望動機に関わる小論文審査などで学生を評価し、必要な学生に支援が届く制度設計も必要である。

神戸大学国際人間科学部 GSP の「全員留学」が始まって 3 年が経過しようとしている。その効果も課題もこれからさらに明らかにし、若者が国境を超え他者と出会うことによってもたらされる学びの中身を解明していくことを今後の課題として挙げて、筆をおきたい。

## 引用文献

独立行政法人機構大学評価・学位授与機構 (2015) 「平成 26 年度実施 大学機関別認証評価 評価報告書 神戸大学」 (2020. 1. 20 On-Line)

<https://www.kobe-u.ac.jp/documents/info/project/evaluation/ninshyo-kekka26.pdf>

独立行政法人機構 日本学生支援機構 (2019) a 「平成 29 年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果」 (2020. 1. 20 On-Line)

[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_s/2018/index.html](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/2018/index.html)

独立行政法人機構 日本学生支援機構 (2019) b 「2019 年度海外留学支援制度(協定派遣)事務手続きの手引き」 (2020. 1. 20 On-Line)

[https://www.jasso.go.jp/ryugaku/tantoshu/study\\_a/short\\_term\\_h/\\_icsFiles/afieldfile/2019/02/06/2019\\_tebiki\\_haken.pdf](https://www.jasso.go.jp/ryugaku/tantoshu/study_a/short_term_h/_icsFiles/afieldfile/2019/02/06/2019_tebiki_haken.pdf)

星野晶成 (2018) 「日本人大学生の海外留学の変容—名古屋大学の ASEAN 海外留学を事例に—」『異文化間教育学 第 48 号 海外留学と異文化間教育—学びの評価とキャリア形成へのインパクト—』

河合塾 (2019) 「留学・海外研修必須の大学・学部 (抜粋)」 (2020. 1. 20 On-Line)

[https://www.keinet.ne.jp/global/ryugaku\\_must.pdf](https://www.keinet.ne.jp/global/ryugaku_must.pdf)

文部科学省 (2014) 『大学における教育内容・方法の改善等について Q3』 (2020. 1. 20 On-Line)

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/003.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/003.htm)

落合知子 (2017) 「終章 グローバル人材とはだれか」松田陽子他編著『多文化児童の未来をひらく

—国内外の母語教育支援の現場から』 学術研究出版

お茶の水大学 学術 IR・教育開発・教育支援センター (2015) 「平均的なバイト時間とその程度までは成績に影響なし」『学修行動比較調査結果 5つのファクト 2015』 (2020. 1. 20 On-Line)

[http://www.cf.ocha.ac.jp/crdeSite/ir\\_kyo3.html](http://www.cf.ocha.ac.jp/crdeSite/ir_kyo3.html)

奥村信幸、磯貝健、竹内理 池田伸子 高橋恵美子 「座談会 全員留学に期待する効果と注意点」『大学時報 No. 377 2017. 11』 (日本私立大学連盟) (2020. 1. 20 On-Line)

<https://daigakujihou.shidaiaren.or.jp/download/?issue=377&section=1>

山本冴里 (2016) 「派遣留学生としての事前の学びを、どのように支えるか—山口大学国際総合科学部の事例—」『ウェブマガジン留学交流 2016年5月号』 (2020. 1. 20 On-Line)

[https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2016/\\_icsFiles/afieldfile/2016/05/02/201605yamamotosaeri.pdf](https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2016/_icsFiles/afieldfile/2016/05/02/201605yamamotosaeri.pdf)

横田慧, 花山陸, 山本名菜, 後藤彩花, 宮木夢菜 (2020) GSP 演習 (リフレクション) グループ発表 「留学に行ってよかったと思える条件」 (2020. 1. 17) レジメより